

Bookstart Newsletter



2021
秋
No.74

ブックスタート・ニュースレター



茨城県牛久市（2018年12月撮影）

特集

絵本の力

～「声」と「対話」で育む信頼関係～

長引くコロナ禍は、私たちの生活や社会に様々な影響を及ぼしています。思うようにいかないことも多いですが、日常の中にあるものの良さに改めて気づくといった変化も生まれています。

その中の一つが、自宅で過ごす時間が増えたことに伴う「絵本」への関心の高まりです。「出版指標年報2021年版」(出版科学研究所)によると、2020年の絵本の売上は対前年比5.8%増だったといえます。

今、その存在に注目が集まっている「絵本」ですが、赤ちゃんの健やかな成長においては、どのような役割を担っているのでしょうか？

今回の特集では、長年にわたり公立図書館で、絵本を通して子どもの育ちを支えてきた司書の伊藤明美さんにインタビュー。現在勤務されている保育園での経験も踏まえ、赤ちゃんの成長における絵本の役割、ブックスタートでの読みかきかせが保護者にもたらすもの、自治体が予算を確保して各家庭に絵本をプレゼントする意味などについてお話しいただきます。

Interview



保育園図書顧問・司書

伊藤 明美さん
Akemi Ito

千葉県浦安市市中央図書館に33年間司書として勤務。市のブックスタート事業の立ち上げや実施にも携わる。現在は、社会福祉法人芳雄会保育園司書として園児への読みかせや絵本の選書・展示等を行うほか、大学講師、絵本専門士養成講座講師等としても活躍。2001-2003年度ブックスタート赤ちゃん絵本選考委員。

気持ちを受け止め、応える

—— 絵本で「対話」を

保育園で読みかせをしていると、1・2歳児クラスの子ども達は、前に出てきて絵本をさわろうとしたり、「ネコ、ネコ」と話しかけてきたりします。そんな時、私は「ネコがいるね」などと応えながら読んでいます。

もちろん、まだ言葉を話せない子もいますし、何も言わない子もいます。でも、何も言わないから聞いていないという訳ではありません。「うんうん」とうなずいたり、エツという顔をしたり。子どもの息遣い、視線、姿勢、動きなど、ちょっとした反応を大人が感じようとするのが大切です。

気持ちをしっかり受け止めてあげると、子どもたちは自分を見てくれていることを感じ、さらに反応を返してくれます。そこにコミュニケーション

ションが生まれ、人との信頼関係が育まれていきます。

小さな子どもたちと絵本を読むときは、この「対話」がとても大切なのです。



1歳児クラスでの読みかせ

「声」で抱っこする

長年ストーリーテリング(*1)も行っているのですが、語り終えると、子ども達はとても親しげに私に近づいてきます。その様子に、なぜ語る前後で子どもとの距離が違ってくるのだろうと不思議に思っていたので

すが、臨床心理学者 小川捷之^{かつゆき}さんの講演録に、その答えがありました。小川さんは、子どもの基本的な信頼感・安定感^{信頼感}は、ふれる、抱く、さするといった身体感覚を通して得られるものであると説明した上で次のように言います。

「人の声を聞くというのも、基本的には身体感覚なんだってことです。子どもは、お母さんの声を聞くと、お母さんにさわられている感じがするんです。声というのは、鼓膜を動かすわけでしょう。だから、一種の身体感覚なんです」(「人格形成における空想の意味」*2)

声で抱っこする感覚とも言えるでしょう。絵本も生の声で読むことで、小さな子どもは読んでくれる人に信頼感を持つのですね。

*1 語り手が昔話などの物語を覚え、本を見ないで聞き手に語ること

*2 『昔話と子どもの空想』(東京子ども図書館)

子どもは大好きな人と「楽しさを共有」したい

ただ、私が子どもに絵本を読んでもあげて欲しいと思うのは、何よりも子ども自身がそれを楽しいと感じ、その楽しさを大好きな人と共有したいと願っているからです。

園で読みかせをすると、子ども

達は「面白いでしょ」といった表情で、そばにいる保育士さんを見たりします。そして、必ずと言ってよいほど、お迎えにきたお母さんにその絵本を読んでもらいたがります。大好きなお母さんにも「ねっ、楽しいでしょ」と伝えたいのでしょうね。

「楽しさを共有することが、子どもの読書なのだ」ということを、私は子どもたちから教わりました。



「パパ、ママ！面白いでしょ！」

「実感」が保護者を変える

園では、家庭でも絵本を楽しんで欲しいと考え、読みかせた絵本を保護者に紹介する展示をしたり、コロナ禍前は親子で読めるコーナーも作っていました。絵本に関心を持ってくれる保護者も多く、今年2月には父母会主催で絵本講演会が開催されました。でも、参加者の中に、「一

度も子どもに絵本を読んでやったことがない」というお母さんもいらしたんです。

そのお母さんが講演会をきっかけにご家庭で絵本を読んでみたところ、お子さんがとても喜んだそうです。その様子を「こんなことで嬉しく思うんだ！絵本って面白い」と感じ、今では毎晩お子さんと絵本を楽しんでいるといいます。

それまでも、絵本は子育てに役立つと聞いてはいたけれど、実際にはどういふものかをご存じではなかったのでしょうか。「絵本は楽しい」と実感したことが、お母さんが変わった一番の理由だと思えます。

ブックスタートでの読みきかせが保護者にもたらすもの

ブックスタートでは、ただ絵本を渡すだけではなく読みきかせをしますよね。それがすごく大事なのです。読んであげると赤ちゃんが絵本を見たり笑ったりする。その様子を見て、保護者もお母さんが読んであげようと思えるのです。

また、我が子が地域の人に優しく語りかけられる様子を、保護者は「この子はみんなに愛されて育つんだ」と気づくのではないのでしょうか。すごく安心すると同時に、社会に対す

る見方も少し違ってくる。そして、もっともっと子どもが愛おしくなる。ここにブックスタートの意味があるように思います。

コロナ禍の今、親子の愛着形成だけでなく、社会全体でこの子を育てるといふメッセージは、孤立しがちで不安な毎日を過ごしている保護者に、より響くものがあるのではないのでしょうか。

すべての家庭に絵本が届く意味

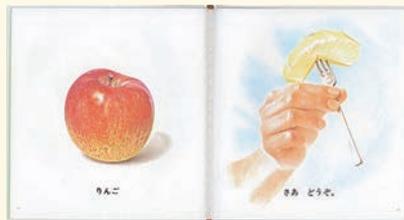
今、絵本が好きなのは多いですが、絵本にあまり関心がない、家に一冊も絵本がないというご家庭もあります。それでは子どもが絵本に出合えません。ですから、ブックスタートで赤ちゃんがいるすべての家庭に絵本が届くというのは、革命に近いような気がしています。

絵本をもらうことで「じゃあ、読んでみるか」と思い、「赤ちゃんも読んでやると聞くんのだ」と気づく。こんなところから、家庭での絵本の時間は始まっていくのです。

一冊の絵本を読む時間は2〜3分ですが、大好きなお父さん、お母さんの声で読んでもらうことで子どもの内面が育つ、意味の深い貴重な時間です。そうした時間が家庭で持たれることを願っています。

● 絵には深いわけがある

『くだもの』の絵が、フォークの柄の上の方を持って「さあどうぞ」と差し出されていることに気づいた時、すごいなと思いました。上の方を持っているのは、子どもがフォークを持ちやすいようにですね。そこまで考えて作られているのですね。



『くだもの』 作：平山和子 福音館書店



● 子どもの個性が絵本で分かる

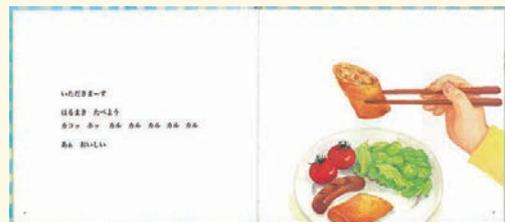
『ふね』を読んでいても、「クルマ、赤いの!」と船に積まれた車の存在に注目する子もいます。同じお話を聞きながら、視線の先は好きなもの。子どもの個性が分かります。



『ふね』 作・絵：パイロン・パートン 訳：こじまもる 金の星社

● 大人にも新たな気づきが

私たちが食事の音として思い浮かぶのは「パクパク、モグモグ」位ですが、『おいしい おと』は、いろんな音があることを教えてくれます。あるお母さんは、春巻きを食べる「カコッ ホッカル カル カル カル カル」という音に興味をもち、実際に作ってお子さんと食べたそうです。



『おいしい おと』 文：三宮麻由子 絵：ふくしまあきえ 福音館書店

当NPOウェブサイトから
ダウンロード
(無料/A4 19ページ)
できます！

＼ 小児科医監修！ ＼

ブックスタート事業における

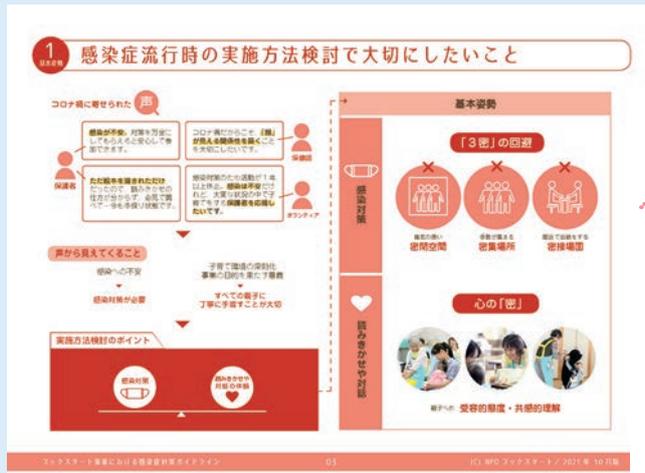
感染症対策ガイドライン 発行

ぜひご活用
ください！

コロナ禍での安全な事業運営の参考にしていただくため、小児科医による監修のもと、ブックスタートにおける感染対策をまとめたガイドラインを発行しました。

本ガイドラインでは、「感染対策」と「読みきかせや対話の体験」の両立という観点から、

①基本姿勢 ②場面ごとの具体的な対策 ③チェックリスト ④事例について掲載しています。



● キーワードは「心の密」

「感染対策」と、「読みきかせの体験を届ける工夫や親子が安心できる対応」の両方を重視したガイドラインです。「3密の回避」を徹底する一方で、「心の密」は大事にしています。

● 対策の目的と方法を明示

各場面ごとに「ゴール」を設定し、何のために対策を行うのかを明確にしました。

● 小児科医のアドバイスや対策のポイントも

コロナに関する専門的な解説を各場面ごとに掲載したほか、対策の詳しい内容や役に立つ情報を「POINT」で紹介しました。



お知らせ

* 詳細は下記 QR コードまたは当 NPO ウェブサイトからご覧いただけます

全国研修会 2021

日時：2021年11月25日(木) 14:00～16:00

① 講演

『地域で育もう、子どもと家族！
～社会の宝物を預かる私たち～』
小児科医 三石知左子さん
(東京かつしか赤十字母子医療センター 院長)

② 報告・事例紹介

NPO ブックスタート
・読みきかせの体験と絵本の
プレゼントがもたらすもの
・コロナ禍のブックスタート



子ども・社会を考えるシリーズ 講演会

日時：2022年2月5日(土) 14:00～15:50

講演 『つながりあう力

～公民協働で社会をつくる～

講師 村木厚子さん

(元厚生労働省事務次官/津田塾大学客員教授)

聞き手 吉田明世さん(フリーアナウンサー)



ことのは

NPO ブックスタートのスタッフが出会った言葉

そこまで私が娘と過ごしたいと思うもうひとつの理由。それは、
その記憶をほとんど娘は忘れてしまうからだ。 [大泉エッセイ 僕が綴った16年] (大泉洋 著・角川文庫) より

「パパ絵本よんで」。5歳の娘のリクエストに応えるべく、多忙な中でも時間をやりくりし、睡魔と闘いながら、絵本タイムを楽しんでいたという俳優の大泉洋さん。幼い頃の記憶は、成長とともに忘れてしまうもの。だからこそ、娘との「今」を心に刻み、後にそれを語ってあげたいと考えたそうです。パパが幸せな記憶を語るの、何年後のことでしょうか？ 手元に思い出の絵本が残っていたならば、タイムマシンのように、二人を「あの頃」に連れて行ってってくれるかもしれないですね。